

ものづくり と匠の技

精工匠造

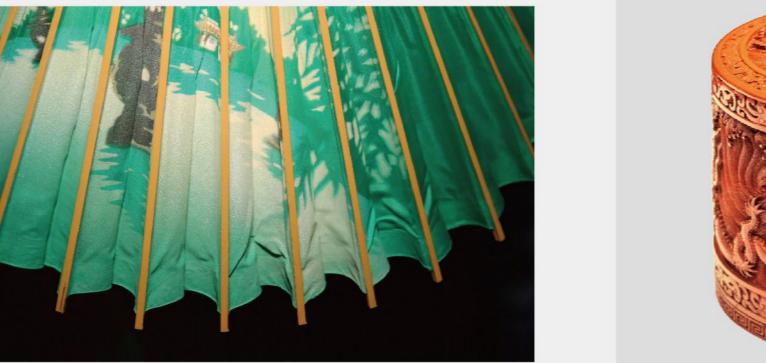
匠造



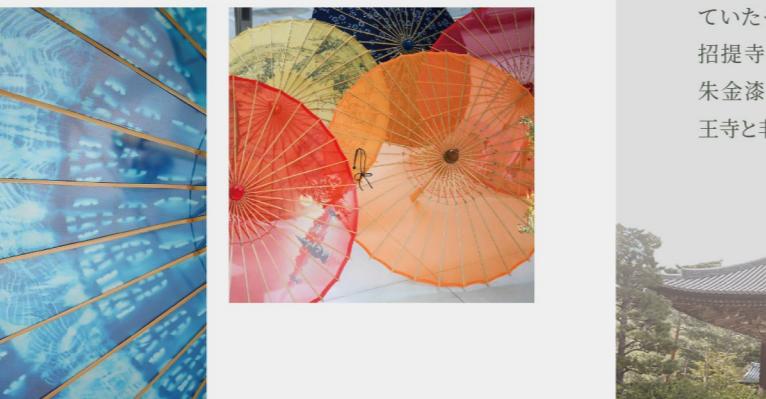
中国での傘の歴史は長く、伝説によると、4000年以上前の黄帝時代に誕生したものです。古代中国の傘には、傘蓋が四角または丸に、傘の柄が湾曲または直線に作られ、表面には刺繡または絵が描かれ、生地には絹または羅が使用されています。平安時代、日本の「遣唐使」が唐を訪れ、中国の天文や暦、仏教やお茶、音楽や漢字とともに、唐傘の技を日本に広めました。江戸時代になると、庶民文化が栄え、和傘を作る職人技もますます高度になり、傘をさして梅の花を眺める美しい姿が、浮世絵「美人画」に永久に残されました。

奥深くで
見られる精巧な技

西湖綢傘



時は現代になり、創意工夫により、中国の江南と隣国の日本との間の芸術的な「調和」は、新たな「Uターン」を実現しています。1930年代、杭州の「絹の王」と呼ばれた都錦生は、伝統的な中国の傘作りの経験を受け継ぎ、さらに日本の絹の傘からインスピレーションを得て、「西湖の花」として知られる西湖綢傘を作りました。西湖綢傘には、杭嘉湖特有の絹と杭州富陽で産出されるハチクが選ばれています。竹を骨に、絹を表面に使い、絵付け、刺繡、刷毛塗りなど、複雑で精巧な職人技が施されています。こうやって作られた西湖綢傘には、日没時の疲れた鳥、小川に揺れるしだれ柳、そびえ立つ城壁、調和のとれた植生のある湿地など、杭州の景色が描かれています。スケッチでも手描きでも、江南の美しい景色は絹の上に魅力に満ちています。



今になっても、西湖綢傘は「江南の今のが声」を歌い、新しい活力を求めています。絞り染め技術によって傘の表面に与えられた滑らかなイメージ、紙切り技術によって向上した装飾、焼印技術がもたらした鮮やかさ、描金彩絵の素晴らしいなど、多業界の様々な革新的な工夫がその上にされています。自然で精巧な技は、創意工夫から誕生した最も美しい景色に凝縮されています。



奥深くで
見られる精巧な技

朱金漆木彫り



香炉の煙がゆらゆらと立ち上り、ゆったりと経文を唱えている声が聞こえます。日本の古都である平城京の中心部にある招提寺は、緑豊かな農地と木々に隠されており、他の日本の寺院とはまったく異なる中国風になっています。起源をさかのぼると、鑑真が渡日した時、唐風建築のモデルである「天平様式」が日本に伝わり、莊厳な招提寺は「天平様式」の建物の最も優れた代表となりました。そして浙江省省会隅ににある寧波の阿育王寺は、鑑真が招提寺を建立する際に参考していたモデルと言われています。特に招提寺の講堂、舍利殿に採用された朱金漆木彫りの様式は、寧波の阿育王寺と非常に似ています。



寧波では、朱金漆木彫りは非常に有名であり、材料としてクスノキ、シナノキ、イチョウなどが選ばれ、彫刻、漆塗り、金メッキを含む独特的な技術が適用されています。どれほど簡単な器具でも、18の加工技術が施されています。「3割は彫刻で決まり、残りの7割は漆塗りにかかる」と言われる朱金漆木彫りは、他の木彫りとは異なり、彫刻と漆塗りは同じように重要であり、彫刻の時は精巧さにこだわらず、漆塗りの技で人物の表情などのディテールを描き出しています。明清時代になると、朱金漆木彫りが人々の間で人気を博し、結婚式や式典の際の「寝床」や「輿」に使われていました。「千工の寝床」と「万工の轡」は朱金漆木彫りの最高の代表であり、平彫り、浅浮き彫り、中空彫り、吊り彫りを組み合わせ、さらに描金彩絵も描かれています。民俗画を取り入れ、文人が描いた風景や花鳥を彫ったり、詩、表題、印を刻んだりし、江南様式は特に鮮やかになっています。今の浙江省博物館には、「天下一の輿」である「民国時代の万工の轡」が所蔵されています。木彫りで作られ、底部に朱塗りが施された輿には、数百人の小像が彫られており、現存する最も豪華な輿にして、朱金漆木彫りの「百科事典」と言えます。

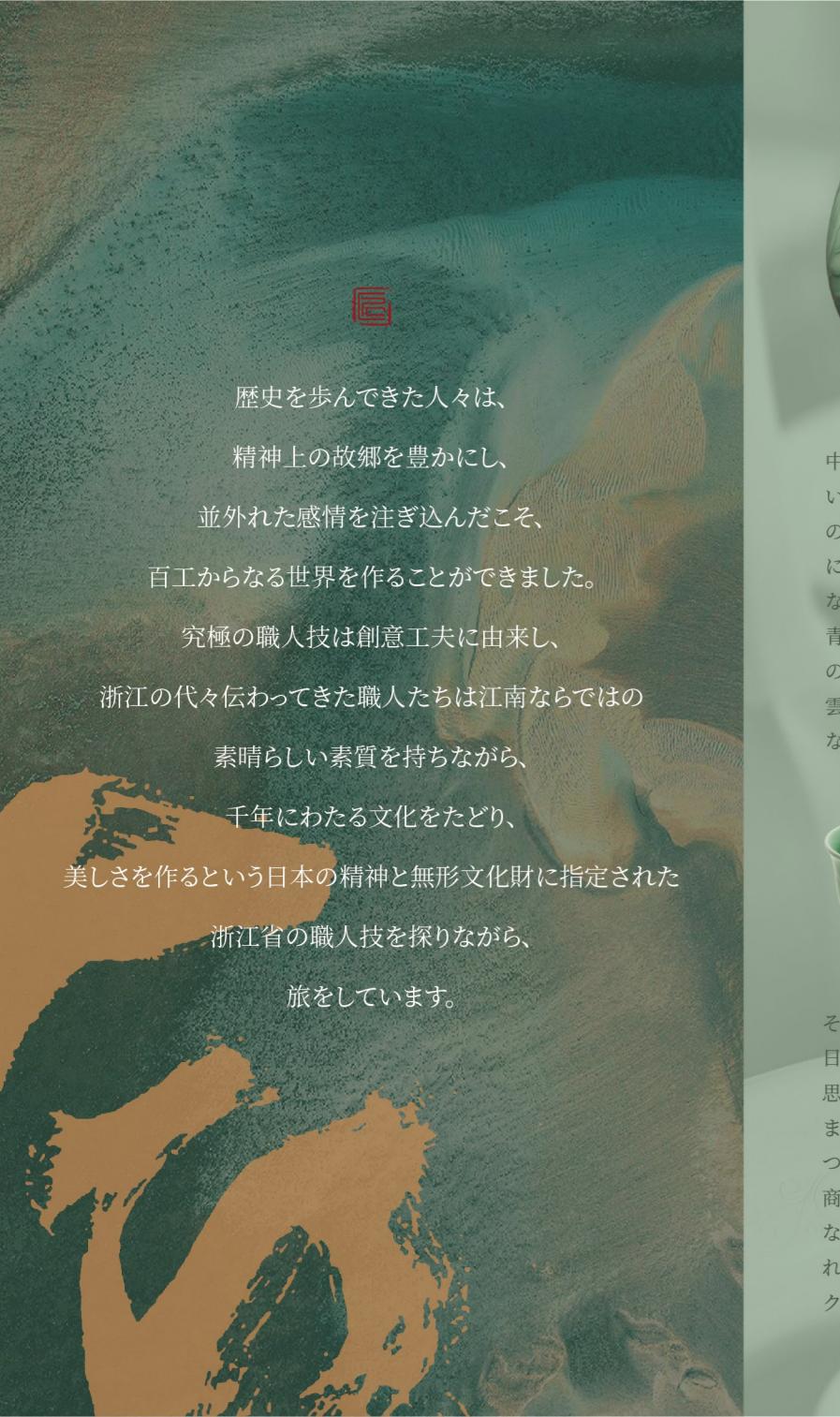


河姆渡で生まれた漆塗りの技法として、今も受け継がれている朱金漆木彫りのは、まるで世界の変遷を見届けてきた目のように、洗練された寧波の旧市街のすべてを長く見守っています。日湖と蓮橋、月湖と州島、屋根裏の蔵書、城隍廟、そして朱金漆木彫りに刻み込まれた時のシルエットはすべて、この街の隅々にまで切り込まれ、世界でも輝かしい跡となるでしょう。



詩畫浙江





歴史を歩んできた人々は、
精神上の故郷を豊かにし、
並外れた感情を注ぎ込んだこそ、
百工からなる世界を作ることができました。
究極の職人技は創意工夫に由来し、
浙江の代々伝わってきた職人たちには江南ならではの
素晴らしい素質を持ちながら、
千年にわたる文化をたどり、
美しさを作るという日本の精神と無形文化財に指定された
浙江省の職人技を探りながら、
旅をしています。



中国の江南では、住居の色合いはほとんど青と白です。江南の青黒いタイルと白い壁や、絵に描かれた風景も、青と白になっており、それと同じように、青瓷は江南のよく見られる風景の美しさを洗練し、「雨過天青雲破処」のように東洋の宝物になっています。



その青色は、世界を魅了しています。そして禅の美しさは、日本に隠されています。日本では鎌倉時代に中国から禅の思想が伝わり、次第に日本で崇められる禅の美しさとなりました。青瓷は禅の提唱する静けさ、素朴さ、自然という3つの美学と調和しているため、日本の多くの美術館、骨董商、財閥、寺院が熱心に集めている陶磁器コレクションとなっています。中国では、龍泉青瓷は常に宮廷で求められ、今の北京故宮と台北故宮には、龍泉青瓷の陶磁器コレクションが依然として多数あります。

中国の陶磁器の全盛期を振り返ると、宋代では、全国に多くの有名な窯がありました。龍泉哥窯で焼成された開片磁は非常に有名で、龍泉弟窯で焼成された青色釉も全国で有名です。当時、山のふもとの川沿いにある青瓷の窯場では、窯の火が赤く、窯の煙がいたるところにあり、窯工は泥を運んだり、素地を引いたり、釉を注いだり、陶磁器の窯焼きが盛んに行われました。宋代の茶詩にある「水瓷の雪鉢」と、陸羽の「茶經」にある「水のようない青瓷」は、同様に青瓷の焼成を絶賛しており、水のようにひび割れた開片釉の表面が「割れかけているかのようで割れていない」という繊細な美しさを演出しています。「粉青」、「淡青」、「油青」...ヒスイに似て、ヒスイではなく、ヒスイをも勝り、温かみのあるクリアな釉を施した青瓷は、まさに東洋のシンプルな美しさを最大限に表現しています。

「中国の陶磁器の歴史の半分は浙江にあり、浙江の陶磁器の歴史の半分は龍泉にある」と言われるるるに、龍泉は明清時代の全国的な陶磁器の製造拠点であり、「海のシルクロード」の重要な出発点でもありました。龍泉青瓷は、アジア、アフリカ、ヨーロッパの3つの大陸における50か国以上に広がり、東洋文明が世界に通じる架け橋を築いています。青瓷を満載した商船が浙江から出発し、陶磁器の伝説を書き続けています。



巧みに作られた魅力



日本では神聖な物であり、神の宿る場所とされている竹は、その旺盛な生命力から不屈の精神の象徴となっています。室町時代には、中国から煎茶や竹工芸が日本に伝わり、大阪や関東など漢風が栄えた地域では、唐の竹籠に習い、竹のしなやかさと素晴らしさを極限まで高めた結果、次第に文人の美学に適応し、自然の風景と調和する和風竹編みとなりました。

江南の煙、雨、青黒いタイルと白い壁を通り抜け、古い職人技が歴史のほこりから出てきました。7000年前、余姚河姆渡鎮の祖先である慧志は、竹で道具を作りことを試みました。そして2000年前、当時の嵊州の人々は、巧みな手で何度も何度も編み直し、竹を編む技術が生まれました。嵊州の竹細工では、丈夫でまっすぐな竹が使用され、髪のように細い糸や、紙のように細い薄片に切り、それを編んでバスケット、皿、箱、スクリーン、ランプなど、6000種類以上の製品を作りました。嵊州の竹細工では、繊細さと荒っぽさの両方が求められています。精巧さと繊細さを求める人は、1寸以内に150本の竹の糸を編むことで、1ミリの糸は曲がっても割れず、羽のように薄い竹製品を作っています。シンプルさと荒っぽさを求める人は、竹の弾力性を十分に生かして曲線の美しさを捉え、竹ひごを絡み、絡み合わせ、巧みに編むことで、気質の豊かな器具を作っています。

数千年の時間が経ち、嵊州では職人の熱烈な心は世代から世代へと受け継がれ、「中国の竹細工の故郷」としてたたえられています。

